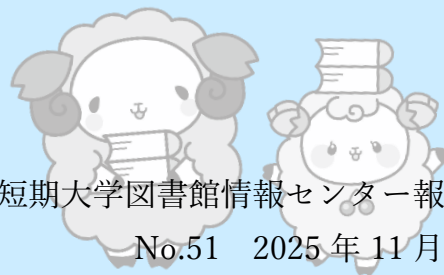


LIBRARY NEWS

桜の聖母短期大学図書館情報センター報
No.51 2025年11月



■冬休み長期貸出(図書)を行います■

対象期間：12/10（水）～12/20（土）

返却日：1/5（月）



■12月・1月は開館日・開館時間に変更があります■

桜の聖母短期大学図書館カレンダー

2025年12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

2026年1月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

	8:45～17:00 平日開館
	8:45～11:00 土曜開館
	9:00～16:00 冬休み中の短縮開館
	9:00～12:00 クリスマスイブ短縮開館
	休館日

※ 開館日・時間は図書館ホームページでも
ご確認ください！

桜の聖母 図書館



書評大賞 入賞作品をご紹介します。受賞者の皆さん、おめでとうございます！



【書評大賞】

キャリア教養学科2年 まつもと この か 松本 瑚乃夏

『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス(著) 小尾 茉佐(訳) 早川書房

本書の主人公は、知的障害を抱えた 32 歳のチャーリー・ゴードンである。彼は強い学習意欲を持ち、「賢くなりたい」という願いがあった。そんな彼の姿勢が、ある大学の脳外科医の目に留まり、人間の知能を人工的に高める臨床試験の被験者に選ばれる。脳手術の結果、彼の知能は飛躍的に向上し、IQ68 から IQ185 の天才へと変貌を遂げる。

物語は、彼自身が「経過報告」として日々の出来事を綴る日記形式で進行する。手術前の文章は誤字脱字が多く稚拙だが、知能の向上とともに文体の語彙は豊かに、理路整然となり、やがて冷たさすら感じさせるようになる。しかし、その変化は知的成長だけではなく、人間としての孤独の始まりでもあった。知識の増加と反比例するように、彼の心は次第に孤立していくのである。

彼は、知識を得る喜びや難解な問題を解く楽しみを覚えると同時に、かつては理解できなかった真実を次々と知る。自分が「友達」だと思っていた人たちに馬鹿にされ、母親に嫌悪されていたという事実。手術前には気づけなかった残酷な真実が、明晰な思考とともに彼を苦しめる。彼は「賢くなれば人々に愛され、幸せになれる」と信じていたが、それは幻想だった。人々の善意の裏に潜む蔑視や恐怖を知ってしまった彼は、次第に深い孤独に沈んでいく。

急速に発達した知性と未熟な感情の乖離は、彼をさらに追い詰めた。妥協を知らず、理屈や正義感ばかりが先走り、周囲との関係を壊してしまう。彼は知識を得た代償として「心」を失っていったようにもみえる。知性が人間を高めるはずのものであるのに、それがむしろ彼を不幸にしていくという皮肉な構図がこの物語の核心にある。

やがて、実験の先駆けであった白ネズミのアルジャーノンに異変が起こる。アルジャーノンの姿を見て、彼はこれからの自分の運命を悟る。彼はアルジャーノンの姿に自分の未来を重ね、知性よりも人間としての尊厳を守ろうとする。過去の自分に戻ることを恐れながらも、最後まで他者への慈しみを忘れない。最後に記された一文には、深い哀しみと優しさが込められている。

本書が投げかけているのは、「人は知識や理性を手にする事で、本当に幸福になれるのか」という問いである。知ることは、時に無知よりも苦しみをもたらす。しかし、彼が最後に見せた他者への思いやりや弱さを受け入れる姿勢こそが、人間としての本当の「賢さ」なのだろう。

『アルジャーノンに花束を』は、知性の輝きと人間の脆さ、そして優しい心を描いた普遍的な作品である。科学がどれほど進歩しても、人間の幸福は理性だけで測ることはできない。そしてこの物語は、人を愛することと人に愛されることの意味を問いかけ続けている。

【準大賞】

キャリア教養学科2年 あびこなるみ 安彦 成美

『毎年、記憶を失う彼女の救いかた』 望月 拓海(著) 講談社タイガ

『全ての伏線は愛』——表紙に記されたこの言葉の意味は、読み進めるにつれて少しずつ実感として心に残る。記憶を失った彼女と向き合う小説家の男性が、本当に大切にしていたものとは何だったのか。その核心は、読み手自身がページをめくる中で気づくことになる。

物語はまず、彼女の目線で展開される。彼女の戸惑いや心の揺れ、日々の生活の中で起きる小さな出来事や感情の動きが丁寧に描かれており、読者は自然とその状況に引き込まれていく。そして物語が進むにつれ、小説家である男性が記す日記が姿を現す。男性は彼女を救うために日記を書き続ける。小説家だからこそ選んだ記録の形が、物語全体を支える軸になっている。日記は、彼女に向けた行動として表れるが、読み進めるうちにその意味が少しずつ変わっていく。その変化を感じて欲しい。日々の記録を通して、彼の思いや葛藤が自然に伝わり、読者は登場人物たちの一日一日を追体験するように物語に没入できる。また年月や日付ごとに区切られているため、読みやすさも工夫されている点が魅力だ。この日記は男性の必死な想いをそのまま伝える手段でもある。日記の存在が明かされるタイミングや表現の仕方が、物語の緊張感や好奇心を高めていると感じた。

“記憶を失う”という設定は他の小説でもよく見かけるものだ。大抵記憶が戻ったり感動的に締めくくられたりするものが多いが、本作は王道に流されない。だからと言ってバッドエンドでもない。日記は単なる記録ではなく、彼女と男性の関係を支える手段であり、物語が進むと同時にその複雑な意味や奥行きが少しずつ浮かび上がる。救うために日記を書くという彼の努力は、物語の終盤で別の意味を持つようになる。読者は彼の行動の裏にある思いを、ページをめくりながら自分自身で感じ取り、確認していくことになる。こうした仕掛けがあることで、物語は単なる恋愛や日常の物語ではなく、読者の心に静かで深い余韻を残す作品となっている。

読み終えたときに訪れるのは、静かでじんわりとした余韻だ。男性は、日記を書くことこそが彼女を救う道だと信じていた。しかし、読み進める中で浮かび上がるのは、彼にとってそれ以上に大切にすべきものの存在である。ここで初めて、『全ての伏線は愛』という言葉が鮮やかに結びつく。ページを閉じた後も、誰もが心の中で余韻をかみしめ、自分自身の大切なものについて考えずにはいられないだろう。

タイトルに込められた意味は、読後に反転する。単なる恋愛小説ではなく、新感覚の恋愛ミステリーとして、人の心に触れることができる物語である。タイトルや設定からは想像できない展開と、二通りの意味を持つ日記がもう一度手に取りたくなる一冊だと感じた。私はこの驚きと余韻を、是非多くの人に味わってもらいたい。男性が残した日記は物語として閉じて、愛の証としてはこれからも読み手の心に残り続けるのかもしれない。

【佳作】

キャリア教養学科2年 のじ はる な 野地 春菜

『虹の向こうの未希へ』 遠藤 美恵子(著) 文藝春秋

もし、大切な家族と突然の別れが来たら何を思いますか。

今回紹介するのは東日本大震災の際に防災行政無線で避難するよう呼びかけをしていた南三陸町の職員さんののはなしである。

2011年3月11日午後14時45分宮城県沖を震源とするM9クラスの巨大地震が発生し、太平洋側を中心に甚大な被害をもたらした。宮城県沿岸部にある南三陸町で無線放送を行っていた遠藤未希さん（当時24歳）は周囲の状況に応じて冷静に放送をしていた。同僚に10メートル超えの津波が来たため屋上に避難するように呼びかけられても町の人に放送を続けていた。津波はあっという間に本庁舎を破壊し、隣の防災対策庁舎も屋上まで飲み込んだ。波が引いた後の屋上にほとんどの方の姿はなく、手すりなどにしがみついていた市長など10名が残っていた。

著者の遠藤美恵子は地震発生時、娘が呼びかける放送を聞きながら水などを持ち、祖母と車で高台へと避難した。空き地に停車し、車から降りて通ってきた所を見ると壁のようにそりたっていた津波は次々と家や木などを飲み込んでいたのである。心配となったのは娘のことであった。母は、娘は直前まで放送をしていたが津波が来たため、切り上げてどこかに避難しているのではないかと考えた。その日は難を逃れた住民の家でお世話になった。翌日、様子を見ようとしたが瓦礫の山が出来ており、降りられる状況ではなかった。電波などは繋がらなかったが父が身を寄せていた場所は発電所があり、テレビを見ることが出来たのである。住んでいた町は津波により流されていた。映像をみた母は「もう娘はダメかもしれない」と感じてしまった。午後、間一髪で津波を逃れた市長らが集まるベイサイドアリーナへと向かった。もしかしたら、娘がいるかもしれない。そんな希望を持ちながら市長に聞くと「何十人も流された」と話すだけであった。話を聞いた母は父と共に翌日、娘の手掛かりを探すことにした。

避難所や防災センターを探し始めてから約1ヶ月後、最新情報が入った。「中太り、身長160何cm」の遺体であった。両親は娘の特徴は当てはまらなと言ったが足首に赤いリボンが巻かれていること、右肩にある痣によって娘ではないかと確信した。翌週、登米市の警察署で保管されていた遺体がベイサイドアリーナへ移され、確定であることが分かった。家族や交際相手は前から覚悟していたからか思った以上に落ち着いて現状を受け止めることが出来た。この頃には全国からボランティアの人が集まり、瓦礫などを退かすことを手伝ってくれた。

今回の紹介は一部であるが全てのページには著者の娘を想う気持ちが込められている。これから先、まだ見ぬ大災害が発生するかもしれない、読んでみると自分の身に起きたとき同じように出来るだろうかと考えさせられる。

【佳作】

キャリア教養学科1年 てらおか かのん 寺岡 佳音

『一晩置いたカレーはなぜおいしいのか ―食材と料理のサイエンス―』 稲垣 栄洋(著) 新潮文庫

「余ったカレーを翌朝食べると、コクがあってなんとも言えずおいしくなっています。どうして、カレーは一晩置くと、おいしが増すのでしょうか？」

これにはカレーライスのある具材が関係しています。その具材とは、いったい何なのでしょう？」

本書はこのような問いの投げかけから始まる。私はこの本を本屋で見つけ、この問いを読んだときに「確かに」となった。私は、カレーが好きなのとこの問いの答えが知りたいという軽い気持ちで本書を手にとった。しかし、読み進めていくと想像以上に深い内容に非常に驚いた。

本書は、カレーを始め身近な料理のなぜにスポットを当て、科学的に解説していくものとなっている。しかし、「科学的に解説」といっても頭が痛くなるような専門的な用語をほとんど使わずに解説している。たとえば、私たちの体を「自動車」に例えたり、「おそらくトウガラシは、種子を運んでもらうパートナーとして鳥を選んだのしょう」という文があったりする。他にも、歴史的な部分にも着目してその食べ物の「なぜ」を解説していて理系の教化が苦手な私でもするする頭に入り、ページをめくる手が止まらなかった。

そして本書を読んでいて気づいたことは、科学にも答えがないということだ。高校までの科学などの理系の科目は明確な答えがあり、それを今まで学んだ知識で決められた正解を導くという考えだった。しかし、科学も文系の科目と同様であると感じた。決められた正解はあるものの、文系科目と同じように「なぜ」と考え続けるのが醍醐味なのであるのだと理解した。私は苦手であった理系科目に対する印象が変わった気がする。

本書を読み、最近私の行動は変わりつつある。身近なものに対して、「なぜ」こうなのかと考えることが増え始めた。たとえば、深夜に食べるラーメンはいつも食べるラーメンよりおいしいのか、スマホが鳴っていないのにスマホの振動を感じるなどだ。このようなことにもきちんとした理由があり、それを考えることが楽しい。幼いころは、すべてのことに疑問を持っていたが、大人になるにつれて少なくなってしまった気がする。本書を読んで、その感覚を大切にしたいと改めて感じた。

本書は私のように理系科目に苦手意識がある人におすすめしたい。私は今まで文学作品しか読んでこなかったが、初めて本書を読み、「科学っておもしろい」「科学は私の生活に意外とつながっているんだ」と気づくことができた。

私は、一晩置いたカレーのおいしさの秘密を知ること以上のものをもらえたと思う。本書は知識として頭に残るだけでなく、日常の風景への見え方が少し変わった。ぜひ手に取って読んでほしい。もしかしたら、ふとした瞬間に「なぜ？」と考えるだけでも少し世界が広がるかもしれないからだ。

Library News No.51 桜の聖母短期大学図書館情報センター

https://www.sakuranoseibo.jp/library_information_center/

* 図書館ホームページにて Library News のバックナンバーを公開中です！

新着図書などもご覧いただけます。

HP も

見てね♪

